

ここにおいて成功と失敗の距りはあるのか、ないのか、あってよし、なくてよし、その距離に味を持つこと自体が、人間の即ち己れ自身の縛につくことであろう。ここに到ってはじめて、いままでに浮んだすべてについて語る用意があり、必要があり、消える自然の愛が、また必要なかもしれない。そして、ふたたび人は、人生を語らねばならない。思えば、我々は不遜にも人間を越えようとした。いや、私はと限定する必要がありそうだ。ときあたかも、日本が不遜の試み大東亜共栄圏と称した戦いの、本人が一番さけたかった敗戦という型を受け入れざるを得なかった生代として、またもや自信を持ち得るエネルギーの蓄積、即ち、戦後、基本産業の石炭がクヅれ新しい不安をいやす、トランクライザーなる精神安定剤なるものが生れ、戦後、はじめて自前のなんといおうか、ちょっと言葉につまる“運動なるもの”“思想らしきもの”“行動らしきもの”が多発した季節、また我々の“九州派になるものもまたまた誕生したもの”である。この自前という奇妙キテレッツなる故に、いまだにその言語症になれたしんでいるハイが、田舎にしてはあってはならないタイハイ、簡単にいうなれば、スラム化が存在しているのである。田舎においては、朝から酒をあおって露路にぶっ倒れているということは許されない文化現象なのである。そして、いまだにその特殊な、若き日の誤りについて語るウシロメタさに、その誤りの根元がある、自然のエネルギー、そういえばいまでも石油、原発にしてもウラン鉱と、なにほども石炭から進んでいないにもかかわらず、産業というワク、仮面の中では、遠くに過ぎ去り、すでに25年前の神話として、九州派は前衛の花として、三池は石炭産業の敗残の身として、この人命の高騰の世に、500万円という人命代を受け入れざるを得ない一つの断層を、この九州の地において示しているのである。この国の基幹産業であった石炭、ゴミ的人間失格の画家の集団が、対比される今日、九州はいったい、なにであったのだろうか。国家とはいったいなにであったのか。問うな、戦うな、生きるな、そして、労働者とは、人間とは、女とは、男とは、そしてまたしても画家とは、いったいなにであったのか、そしてまたしても問うてはならない現象が沸き起っているのである。それについて語ることは難しい。画家は自らそれについて答えつづけているのかもしれない。いやいや私の答えは、いつも中途半端で、これが答えではない。答えは永遠にないと言いつづけているのかもしれない。それは、ともかく思い出について語ろう。その思い出にしても、この現実書いている文字が本になるか、ならないか、いまだに判らないという段階であり、おそらく出来なくても少しも不思議はないのである。別な見方をすれば、本にならないように懸命に努力しているといった現況なのである。本を出版しようとして不可能にする原因とは一体なにであろうか。それこれ私がつもって生れた体質なのか、いっこうに私には説明つかないにもかかわらず、ものごとは進展しないのである。この現象がそっくり私の人生であり、おそらく私自身、そのことについて不満はないのである。計算しつくされているにもかかわらず、ユキアタリバツタリ、思えば、この10年間、いや正確に言えば13年間、正確な時間表の運行であった。日本への帰国は一年前から確定され、画廊は画商が計画して、その日数に間に合うよう私は飛行機にのって帰ってくるというキワメで正確な日

程にのった生活であって、その日程の先には正確な私の死亡の日時が書き込まれていれば、私はその時刻に合わせて死亡することも出来るでありましょう。私自身、その時刻表に対して、なんの疑問も抱いていないというのが現在の私の心境を一番よく言い表わしている。その計算を、つきくずしたのが1987年2月20日の逮捕であり、牢獄であってみれば、やはり九州派という古い歴史はあろうとも、やはり出発は牢獄からということになります。時間表というものはお客さまが汽車、飛行機に乗り遅れないために、いわゆる自分のために使用するものであって、決して他人から使用させられるものではない。それ故、牢獄は一応、決して自らが願って使用するものではなく、自分以外の“もの”に、強制されるものであってみれば、その間の距離は随分と面白くも訳のわからないイキドオリも生れてくる。そして、パリの弁論士は有名人を使う作戦にでた。一つの画廊しか（パリではの話）持たない私は、まずその主人であるロマノフ先生にお願いした。簡単にOKして下さい。前年、グランパレでの私の作品に注目していただいた評論家のマダム・クロード・ドバード先生にお願いした。これもOKして下さい。それで私の知り合いはおしまいなのである。私は江原先生を考えて電話するがベルギーの、その電話番号には通じないのである。私は駄目だと覚悟して手紙を書いた。その2日後である。江原先生から電話で「桜井さん、気落ちしているのではないか、おれがやるから心配すな。それが評論家の仕事だ」と言ってきた。もうそれ以上、書く必要もないだろう。そしてお世話になり加勢していただいたのが、我が友、島本先生なのである。そして、そして、弁護士、マキシム夫婦との奇跡的な出逢を経験して、ものごとが動きはじめた。その時、貧乏人の話ではない。巨万の富を持った社長、星野先生の話である。その時、星野社長は日本にいた。その日本から電話で、「桜井さん、金ですむことならやります。安心して下さい。」これは会社あげての援助である。なんたる感謝、感激こんな遭遇には無縁な人間と思っていたのに、いや決して願っていないものに出逢った驚き、社長星野先生との出会いを語れば長いことになってしまう。さて、なんとって説明していいのか、やはり、ありふれているけど結局は語らないことの方が語ることになるのではないかということで、この大切な話は断片としよう。絵のことを語ろうとすれば三池炭鉱のことになり、なかなか源流にたどり着くことが出来ない。それこそ、私は、もともと源流にたどり着こうてなオオソレタ考えはない。蛇の尾のように切れてなお動くエネルギーであるのか、焼き捨てられる運命にある一杯のゴミ箱の絵なのか、私には判らない。また判ろうともしないといったら言いすぎであろうか。何度も書くように、この文章が日のめを見るか、暗闇の中に消えて行くのか、この、この一瞬になっても信じられないのである。なんたる不思議な一瞬であることか。自分ながら、かくも一寸先が不明なのは立派なことであると勘違いしているのである。思えば我が人生は錯覚ばかりの人生であった。錯覚か芸術であり、絵画であるとする説があるなら、この私だって画家の一員であるrになる。なんとウレシイことであろうか。このように恐れを知らない素人の人間を、より人間と思う錯覚、これが私達、いや、達と呼べば友人にあいすまない。私と限定すべきであろう。これこそが、もう一つの世界であるの

かもしれない。